

ニカメイチュウ（ニカメイガ）

1 発生生態

(1)見分け方

雌成虫は、体長 12～15mm、開翅長 20～25mm、体色は灰白色で前翅は細く角張っており、外縁に沿って 1 列に 7 個の小黒点が並ぶ。雄は雌よりやや小型で色が濃く、灰褐色である。

卵は、1mm 弱の楕円形でイネの葉身や葉鞘に数十～100 個程度の塊で産卵される。卵の色はふ化が近づくにつれて白から茶褐色、黒褐色へと変化する。

幼虫は、老熟すると 20～25mm で艶がある。頭部は褐色、胴体は全体が淡褐色で褐色の線が縦に 5 本走る（写真）。蛹は、15mm 前後の紡錘形で、色は艶のある茶褐色である。

(2) 発生のようす

a 第 1 世代幼虫による被害

本田移植後のイネに成虫が飛来し、葉身や葉鞘に卵塊を産卵する。孵化幼虫は集団で葉鞘に食入する。この葉鞘は黄褐色に変色し、「葉鞘変色茎」と呼ばれる。2～3 齢以降は周囲の葉鞘や株に分散してイネの心部を食害するので、展開前の新葉が枯死する。これは「心枯れ」と呼ばれ、穂数の減少につながる。幼虫は、約 1 ヶ月で成熟し、「心枯れ」茎の株元で蛹化し、7～10 日で羽化する。羽化した新成虫は再びイネに産卵し、第 2 世代幼虫が発生する。

本県では育苗箱施薬の普及により、発生は少なく推移している。

b 第 2 世代幼虫による被害

第 2 世代幼虫は、第 1 世代幼虫と同様に、まず葉鞘に食入するため、イネは「葉鞘変色茎」となる。次いで心部への食入により、出穂前の場合には「出すくみ」、出穂直後の場合「白穂」、開花後の場合「不稔穂」となる。

本県では育苗箱施薬の普及により、発生は少なく推移しているが、中通りと会津の一部で発生の目立つ地域がある。

2 防除方法

第 1 世代幼虫の防除は、有効分げつ茎の確保と第 2 世代の発生量の減少がねらいであり、移植前に育苗箱処理剤を施用するか、葉鞘変色茎の発生初期（6 月上旬～中旬）に散布剤または水面施用剤を用いて防除する。第 2 世代幼虫の防除は白穂の発生防止がねらいであり、第 1 世代成虫（第 2 回成虫）の発蛾最盛日（例年だと 8 月上旬～中旬）の 5 日後に散布剤、または発蛾最盛日～7 日後までに水面施用剤を施用する。



写真 ニカメイチュウ幼虫